

# 日本ねじ研究協会会誌

Vol. I

No. I

1970  
1

日本ねじ研究協会

The Japan Research Institute for Screw Threads and Fasteners.

# 年 頭 の 辞

日本ねじ研究協会

会長 遠山 四郎\*

輝かしく1970年の新春を迎えるにあたり謹んで年頭の御挨拶を申し上げます。

当、日本ねじ研究協会は、御承知の通り昨年10月に新発足を致したばかりでありますので、この正月は名実共に記念すべき最初の新年であります。また、本年は、たまたま1970年代の幕あけの年にもあたり誠に意義深い新春と、心から御喜びを申し上げる次第であります。

ねじ産業は、いまや年間総生産額1500億を突破する大産業となり、我が国の基礎産業の一つとして益々その重要度が高まり且つ広く各界から認められるに至りましたことは洵に御同慶の至りと考えている次第であります。

造船及び自動車をはじめ、いくつかの我が国基幹産業が世界の最上位のクラスにまで伸長したことの陰には、地味なねじ産業の絶ゆまざる努力と、ねじ製造技術の目覚ましい進歩があったためといっても過言ではないと信じております。

この様にねじ業界は、我が国の基幹産業の伸長発展とともに、著しい成長をとげてきましたが、いよいよ1970年代を迎えるに至り、特に資本の自由化という大きな問題を目前に控えての今日、ねじ業界としても、他産業と同様、世界の荒波の舞台で国際的競争力を演じなければならない環境に巻き込まれる覚悟を持たねばなりません。これに対処するため、すでにねじ業界では体制の整備による企業力の強化策を図ってきましたが、一方、最も重要視しなければならない技術力を、米欧先進国と対比して見ますと、汎用の標準形状部品類においては一応の水準に達したともいえますが、ねじ全般の水準と、特に研究開発能力及び総合的生産技術の研究面については、かなりの格差を認めざるを得ません。この格差の是正なくしては、到底国際競争に勝ち抜くことは不可能といえます。この研究開発こそ刻下の急務であります。

加うるに、70年代の技術革新のテンポは、加速度的にそのスピードを早め、変化の激しい年代となるものと考えられます。また生産と消費が益々大型化されていくにも拘らず労働人口は最も減少する年代ともいわれております。これらの諸情勢を克服してゆくため、ねじ産業に於いても、思い切った技術革新が必要であると痛感せざるを得ません。

かゝる時にあたり、ねじ業界にとっては勿論のこと、我が国産業にとって、唯一のねじ総合研究機関である当協会に寄せる期待は非常に大きいのでありまして、当協会の任務と責任は誠に重かつ大といわねばなりません。

幸い当協会は、政府機関をはじめ、あらゆる関連各団体の絶大なる御支援と御協力のもとで、ねじ製造業者をはじめ関連業界の各分野からの会員を迎えていますので、会員各位の御協力を頂けるならば、必ずや多大なる成果を得られるものと確信をしている次第であります。

終りに当協会の発展を祈り、この70年代に良き貢献を果たし得ることを期待しつつ御挨拶を終わります。

\* (株)東京螺子製作所取締役社長

# 設立総会

日本ねじ研究協会の設立総会は、去る昭和44年10月24日東京芝公園の機械振興会館において、会員86名（委任状出席を含む）出席のもとに開催され、予定の議案もとどこおりなく審議可決された。

当日の様様および議事内容の概略はつぎのとおりである。

## 1. 開会の挨拶

（司会者、日本ねじ工業協会・榎本専務理事）

設立発起人代表、速山四郎氏より概略次のとおり開会の挨拶があった。

“ねじ業界は一般産業界の好況に支えられ、今日では生産額も年間1,500億円になんなんとしている。しかしながら技術の革新については、従来の観念を排して処して行く必要があるので、その意味から総合研究機関を創立しないと国際競争力に克てないと思ひ、1年有余の長い時間を費して本日の誕生を迎えた訳である。

学識者、使用者、製造者などの関連の方々の賛意を得て所期の目的を達せられるような協力を願って止まない。”

## 2. 経過報告

司会者よりつぎのとおり経過報告があった。

“実質1年有余の期間を要した訳であるが、そもそも本件は機械工業振興臨時措置法の41年度における基本計画にとりあげた時点からこの設立を心がけたが、基本的問題については、ねじ協会の参与会（山本教授、北郷教授、益田教授、東秀彦氏、技術委員長、会長、専務理事など）で4回検討し、案がまとまった段階で、世話人会を7回（小委員会を含む）開催し、その後公式の発起人会を設置（日本規格協会など16団体）し、これを5回（小委員会を含む）開催して本日に至った。”

## 3. 議長の選任

議長選任の方法について、司会より議場に諮ったところ司会者一任という声があり、司会者は司会者推せんの方法を提案し、議場の承認を得たので、司会者より、本会の発起人である日本機械工業連合会副会長、橋弘作氏が推せんされ万場の賛成を得て橋氏が議長に選任された。

## 4. 議案の審議

### (1) 第1号議案 定款(案)の承認を求める件

司会者より第5条第3項の「但し、ねじを主な事業対象とする企業または……」とあるを、「ねじを主な事業対象とする」の字句を削除し、「但し、企業または……」と訂正して第1章～第8章について説明があった後、議長は本件は事前送付してあるので、逐条審議を省略し、一括審議の提案を行ない、賛成を得たので定款(案)の承認を求めたところ万場一致で、本件は原案どおり可決承認された。

### (2) 第2号議案 加入金および会費徴収規定(案)の承認を求める件

本件は、定款上総会の決議を要することになっているので議長は、議場に本件の賛否を諮りその承認を求めたところ、とくに意見もなく、万場一致で原案通り可決承認された。

### (3) 第3号議案 初年度事業計画(案)ならびに収支予算(案)の承認を求める件

議長より、まず事業計画(案)について承認を求めたところ、議場より、熱処理技術の向上の件を事業計画に入れて貰いたい、という要望が出され、初年度計画の中にも広い意味では盛り込まれているが、本会の事業の中には当然と認められる項目と解釈して貰いたい、という司会者の回答で了承を得たほかは意見もなく、事業計画(案)は原案通り承認された。

ついで、この事業計画に対応する予算(案)について諮ったところ、質問もなく本予算(案)は原案通り可決承認された。

### (4) 第4号議案 理事・監事選任の件

選考委員により、理事・監事を選出し、引続いて理事会を開催して、会長以下の役員を別表のとおり選出した。

なお、常務理事2名は欠員とし、また専務理事は、日本ねじ工業協会専務理事を兼ねているので暫定という形をとることがつけ加えられ併せて了承された。

## 5. 会長挨拶

遠山会長より次の通り就任の挨拶があった。

「皆様のご推挙で会長の指名を受けたが、かねがね本件については自らを知るという立前からもお膳立てだけにして、また個人的には健康上の理由もあり、他の人だと思っていただけ、非力を省みずお引受けすることにした。

立派な幹部の協力を得て大過なく過したかったので、心からのご援助をお願いしたい。”

## 6 閉会の辞



通商産業省吉光重工業局長の来賓祝辞があったのち、山本副会長よりつぎのとおり閉会の辞があつて、無事設立総会を終了した。

“本日待望の日本ねじ研究協会がめでたく発足しましたことを皆様とともによろこびにたえない次第である。

図らずも副会長という指名でとまどっているが、ねじは中小企業が多く、様々の問題をかゝえている。とくに宇宙開発海洋開発などの技術革新を思うとき、現在のねじは甚だ心もとないものを感じているので、何とか衆知を集めて、ねじなら日本というように固く心に期している。

本会が花も実もある団体にしていただくため、格段のご支援をお願いしたい。”

設立総会終了後、同会館の地下2階ホールにおいて、関係諸官庁、諸団体、関係方面および会員など約200名が参集し、設立披露パーティが盛大に催された。

 謹 賀 新 年 

日 本 ね じ 研 究 協 会

会 長	遠 山 四 郎
副 会 長	相 沢 富 士 雄
“	高 橋 孝 吉
“	山 本 晃
専務理事	榎 本 善 四 郎
ほか役員一同	
事務局一同	

東京都港区芝公園21号地1-5

機械振興会館内

電話 東京(03) 436-4988(代)

434-8211(内線531)

# 日本ねじ研究協会役員一覧表

(50音順・敬称略)

会 副 会 長  
" "  
専 務 理 事  
理 事

遠 山 四 郎  
相 沢 富 士 雄  
高 橋 孝 吉  
山 本 晃 晃  
復 本 善 四 郎  
青 山 利 義 光  
石 井 義 昌  
石 橋 助 司  
一 柳 乙 蔵  
伊 藤 鉦 太 郎  
岡 田 総 七 郎  
大 岡 吉 郎  
勝 谷 登 助  
木 村 利 喜 知  
黒 田 利 彰 一  
御 給 健 三  
阪 根 芳 一  
阪 村 義 明  
佐 藤 栄 太 郎  
鶴 水 富 次  
清 鈴 秀 雄  
鈴 森 幸 一  
田 島 喜 代 次  
津 上 退 助  
椿 中 園 克 勝 己  
長 根 島 和 一  
長 谷 川 和 敏 三  
藤 田 敏 一  
北 郷 上 一 蒸  
三 武 藤 野 孝 俊 励  
米 山 野 本 彦 治  
山 渡 本 義 肇  
伏 見 友 二  
藤 原 友 啓 郎  
益 田 亮

東京螺子製作所  
名古屋螺子製作所  
神戸製鋼所  
東京工業大学  
(社)日本ねじ工業協会  
青山製作所  
桂川精螺製作所  
極東製作所  
一柳鉄工協  
(財)日本規格協会  
岡 総 協  
大岡製作所  
佐賀鉄工所  
東京測範協  
黒田精工協  
一志螺旋協  
山科精工所  
阪村機械製作所  
佐藤螺子製作所  
布施螺子工業協  
東京製鉄所  
オーエスジエ協  
尾張精機協  
丸エム製作所  
津上製作所  
協 互 省 製 作 所  
全国鉄螺商業連合会  
三之橋製作所  
萬平製作所  
明道鉄工所  
藤田螺子工業協  
東京大 学  
東洋プラスクリュー協  
津上製作所  
寺内製作所  
協 弥 満 和 製 作 所  
日 東 精 工 協  
自動車ねじ工業協  
協 田 野 井 製 作 所  
相 模 工 業 大 学

監

正

# 第2回理事会

日本ねじ研究協会の第2回理事会は、去る昭和44年11月21日、機械振興会館において、逸山会長をはじめ28名の役員が出席して開催され、つぎのことが審議決定された。

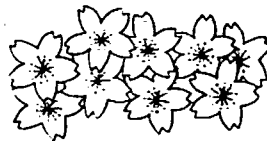
1. 自己紹介 実質的には第1回理事会のため、出席役員全員の自己紹介があった。
2. 組織について 定款第4条の事業項目を大きく4つに分けて、研究委員会、標準化委員会、指導委員会、出版委員会としたものであるが、これについて審議された結果、原案どおり承認された。(別表参照)
3. 分科会の再編成 初年度は、主として旧ねじ研究会の事業を引継ぐことになっているので、本年度ならびに委員長、事業は従来の分科会メンバーで行なうこととした。  
幹事会開催に関する件 従って、その具体策については、従来設置されていた分科会の委員長、幹事会を開いて検討を行なうこととした。  
なお、前項で決定された新しい委員会の委員長・幹事は後刻正副会長会議で決めることとした。
4. 会報、ニュース等の発行について 本年度は残り少ないことでもあるので、取りあえず事務局ベースで会報あるいはニュースなどの形で会員に会の動静を知らせる。  
研究発表、文献の紹介などはいずれ早急に準備し、会誌という形で情報の印刷物を発行することで了承された。
5. 会員希望調査について 来年度事業は会員の希望調査を行なった上で、立案したいため、その調査票の様式を決めてもらうことにしたが、具体的には、運営会議の機構の中で決めることとし、その検討委員につぎの各氏をお願いした。

(順不同、敬称略)

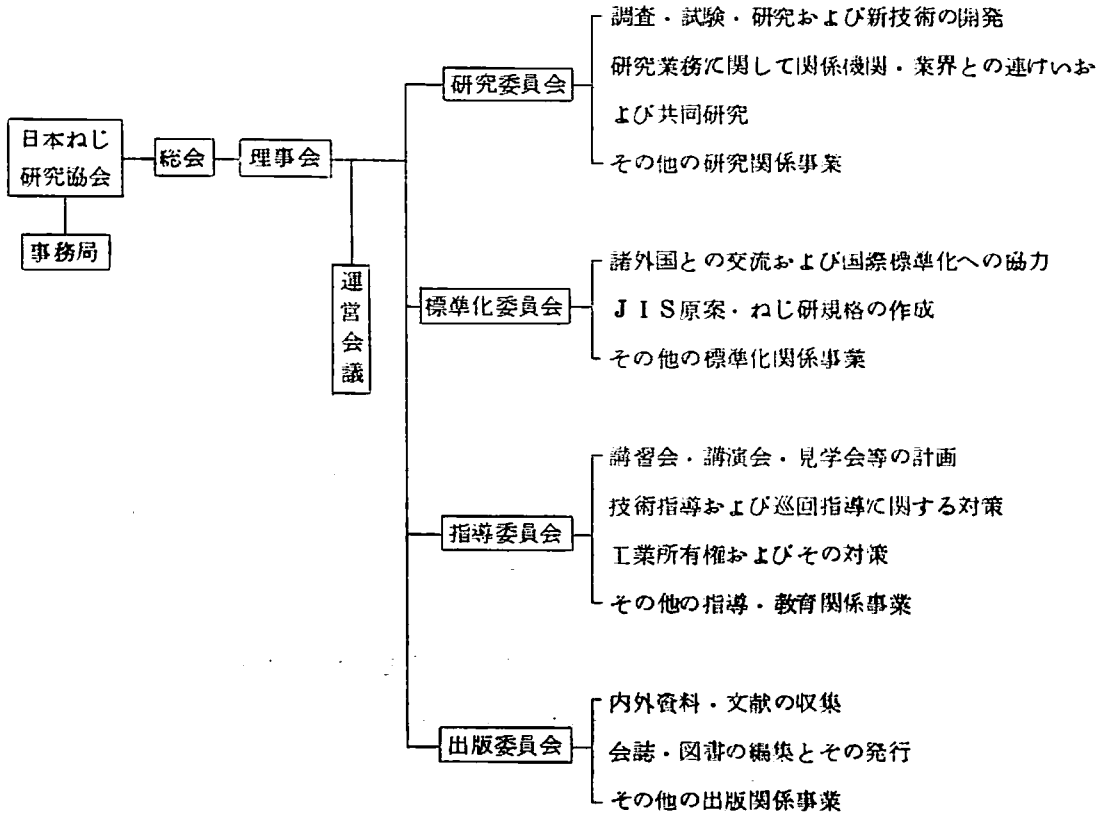
山 本	晃	東 工 大
山 本	肇	彌 漕 和
稻 葉	元 成	東京螺子
守 屋	新 一	東洋プラス
武 藤	孝 治	津 上

小野田 鉦次郎 阪村機械  
宇山川 鉦作 全紙商運  
工技院

6. 小型自動車等機械 昭和45年度小型自動車(オートレース)補助金の交付をつぎの事業名で申  
工業振興補助金の 請することを承認した  
申請について 事業名:ねじの適正締付けに関する実験・研究  
事業費総額:2,182,000円(概算)  
補助金要望額 1,636,000円(概算)
7. 事務機構に関する 地方会員の便宜を図るため、連絡所的なものがあれば便利ということで、大  
阪、名古屋に暫定的に連絡事務所を設けてはどうか。その場所はとりあえずね  
じ協会の両支部に手伝ってもらってはどうか、という提案があり、了承された  
また、守屋新一氏には顧問待遇という形で、事務局の協力をお願いすること  
も併せて了承された。
8. 社団法人申請に関 なるべく早い機会に公益法人に切換えるため、今から準備をしておき、内容  
する件 が整い次第申請するというこで、次回の通常総会を目標として進めること  
とした。
9. 理事会の定期会合 必要のある場合は、その都度開催するが、原則的には3ヶ月に1回ぐらいの  
について 割合で開催することとした。  
なお、12月は理事会を開かず、新年の名刺交換会を1月16日(金)ねじ  
工業協会と合同で開催することとした。



# 日本ねじ研究協会組織表



## 備 考

1. 委員会には必要に応じて分科会を設けるものとする。
2. 各委員会の連絡調整は運営会議で行なう。
3. 運営会議および委員会（分科会を含む）の運営規定は理事会の承認を得て別に定める。

（注） 運営会議は正副会長，各委員会委員長・幹事ならびに事務局を以って構成する。

# 委員長, 幹事会

当研究協会の初年度事業は、主として旧ねじ技術研究会からの引継事業を実施することになっているため、従来設置されていた各分科会の委員長・幹事会を開いて、年度内の方針について検討を行なった。

また、当日は新年度事業計画策定のためのアンケート様式と会誌の発行についても検討された。

当日の概要は、つぎのとおりである。

1. 日 時 昭和44年12月12日 13:30 ~ 16:30

2. 場 所 「機械振興会館」 9号室

## 3. 出席者(順不同, 敬称略)

相 沢 富士雄	副 会 長
高 橋 孝 吉(代 藤井)	◇
榎 本 善四郎	専務理事
北 郷 薫	強度と締付技術研究分科会委員長
江 藤 元 大	同分科会幹事
益 田 亮	圧造技術研究分科会委員長
裏 川 康 一(同席矢倉)	同分科会幹事
武 藤 孝 治	転造技術研究分科会委員長
守 屋 新 一	同分科会幹事
小 川 喜代一	材料技術研究分科会委員長
田 村 紋 平	同分科会幹事
山 田 昌 男	研削技術研究分科会幹事
坂 本 嘉 文	表面処理技術研究分科会幹事
佐々木 務	会誌と文献委員会・文献幹事
宇田川 鉦 作	アンケート様式検討委員
小野田 鉦次郎	◇
山 本 肇	◇
稲 葉 元 成	◇
中 村 智 男	事 務 局

## 4. 議 事

### 4. 1 各分科会の年度内方針について

#### (1) 強度と締付技術研究分科会

これからやるにしても今年の6月ごろから開いていないので、今年度内にまとまるものはないが、来年度から本格的にやりたい。ただ、ステンレスねじの強度、締付け力についての研究は、益

田教授が中心でまとめたので、その説明会はやれる。

年度末までに2回ぐらいの分科会を開いてしめくくりをし、その結果を協会に報告したい。

(2) 圧造技術研究分科会

事業計画の61～64については今後もやって行きたいと思っているが、今後の問題は、アンケートの結果によりその時点で検討したい。

一応新年度に引継ぐためのしめくくりをすすめるために分科会を開き、その結果を協会に報告したい。

(3) 転造技術研究分科会

転造技術研究分科会は、事業計画の71～77までであるが、ほかの分科会とも関連しているものが多く、ダイス、工具、機械との関係などがアンケートに関係する。

高速転造に関する運動学的考察については、平ダイスについては一部データがまとまっている。プラネタリについては、吉本先生の報告で一部進んでいるが、もう少しデータをまとめた。

転造技術シリーズは、本年度においてまとまっているが、リコピーのままになっており、これを正式に発表したいので、このシリーズの印刷だけはしたい。

その他は、アンケートにより練り直したいが、年度内に2～3回分科会を開きたい。

(4) 材料技術研究分科会

材料技術分科会としてとりあげているものは、ねじの材料と工具の材料に分けられるが、今年は1回も開いていない。年度内に2回ぐらい分科会を開きたいが、そのうちの1回は、世界で最も進んでいるS・P・Sのねじ材料、工具などについての話と、ベルツァーなどが実施している中間温度の加工(温間加工)についての話をしたい。

一応事業計画の81～85は継続したいと思っている。

(5) 研削技術研究分科会

砥石損耗テストは前年度から引続いてとりあげ、委員各社の実験は終り、データのまとめも終わった。残っているのは、その発表の形式をどうするかである。

ねじ研削盤の最近の傾向については、カタログその他を集めて傾向をみようということで項目をあげたが、大きな変化がないためか、最近のは集めておらず、今年度は手をつけていない。

水溶性研削油の実験については、小野委員長にお願いしたまま、前年度から引継いだままになっている。

従って、今年度は砥石損耗テストを主体として進めたので、今後の方針はアンケートでまとめた。

(6) 表面処理技術研究分科会

今年度の計画はとくにない。以前にはやっていたが、めっき装置が比較的ねじメーカーに少なく、分科会のまとまりが悪かったので、廃止してはどうか、という話もあったが、各分科会の手伝いとしてこの分科会を残しておいた。

従って、今年一度も分科会を開いていないが、アンケートによって今後の活動が変わってくると

思っている。

#### (7) 会誌と文献委員会

会誌の発行は新しい組織で、出版委員会が担当することになっているが、従来は、会誌には研究成果をのせることで、会誌と文献と合同にするということでやっていた。

今後は、会誌と文献の委員会の性格を明確にしておいて貰いたいと思う。

従来の文献委員会としては、

1. 目次を作る。
2. 目次に従ってフィルムなどで収集する。
3. それを摘録とする。
4. これを集大成して単行本とする。

この最初の成果は、ねじに関する文献摘録集としてでている。

それ以後は、実際には摘録が進まないで、目次集をまとめている。42年までまとめ、それ以後は旧会誌(ねじの研究)のついで。

3月末までに会誌のついで目次を分類整理して目次集として出したい。

委員の構成の仕方は、各分科会の代表として重複して出席していたが、各分科会との関連をどうするか、来年度以降は検討して貰いたい。

#### (8) 切削技術研究分科会

小林委員長および古矢幹事も欠席のため、改めて今後の方針を聞くこととした。

以上、各分科会の今後の方針または希望が述べられたが、最終結論は今後運営会議または理事会に談った上で決定することとした。

#### 4・2 会員要望調査について

当研究協会においては、広く会員が実際に当研究協会に対してどのような事業を希望するかを調査し、その調査結果に基づいて、新年度はなるべく会員の希望に副うような事業を立案するために、会員にアンケートを発送することになり、その様式について検討が行われた。

(当日決定された様式に基づいてアンケートが行なわれますので、多数ご意見をお寄せ下さい)

#### 4・3 会誌の発行について

とりあえず1月号は事務局ベースで、会の動静を中心にした記事で発行することに、順次内容を充実していくことで了承された。

## 会員の加入状況

昭和44年11月20日現在における会員の加入状況は、つぎのとおりであります。

会員の種類			加入数
正会員	企業会員	ねじ部品	63
		関連, 需要	41
	個人		18
特別会員			3
賛助会員			9
合計			134

### 専用電話の開通

日本ねじ研究協会の専用電話がつぎのとおり開通しておりますので、ご利用下さい。

直通 東京(03)436-4988(代)

交換 東京(03)434-8211(内線531)

### ISO/TC1 および TC2 の総会

ISO/TC1(ねじ)およびISO/TC2(ボルト, ナットおよび付属品)の次回総会は、それぞれつぎのとおり予定されております。

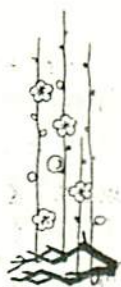
ISO/TC1 1970年9月トルコのアンカラにおいて予定されておりますが、詳細は決定しておりません。9月16日~18日がISOの理事会、21日~26日がISO一般総会があり、TC1の総会はこの前後に予定されております。

ISO/TC2 1970年6月1日～4日まで、ドイツのミュンヘンにおいて開催されま  
す。

## 新年名刺交換会

新年の名刺交換会は、日本ねじ工業協会と合同で1月16日(金)午後4時から、機械振興会館の  
6階66号室で開催されますので奮ってご参加下さるようご案内いたします。

なお、当日は名刺交換会に先立って、同会館において理事会を開催しますから、役員の方々は併せてご  
出席下さるようお願いいたします。



昭和45年1月1日発行(非売品)

編集・発行人 日本ねじ研究協会

専務理事 榎本善四郎

東京都港区芝公園21号地1-5

(機械振興会館)

TEL.東京(03) 436-4988(代)  
434-8211(内線531)

The Japan Research Institute for  
Screw threads and Fasteners.(RISF)

％ KIKAI SHINKO BUILDING

5. 1-21- SHIBAKOEN MINATOKU

TOKYO JAPAN

TEL TOKYO (436)4988